

Title	現代人の孤独を考える：ロンリネスからソリチュードへ（カウンセリング研究会講演会）
Author(s)	越智，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4：8
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2678
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

カウンセリング研究会講演会

現代人の孤独を考える —ロンリネスからソリチュードへ—

越智 裕子

2010年10月22日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催の講演会が開催された。本研究会の目的は、人間存在を巡るこの時代の最も大きな課題である現代人の孤独をどう乗り越えて行くかを共に考えていくものである。そのため、キリスト教会の牧師で、臨床パストラルスーパーバイザー、聖学院牧会電話相談カウンセラーである堀肇氏が、「現代人の孤独を考える—ロンリネスからソリチュードへ—」と題した講演を行った。以下、本講演の概要について報告したい。

「現代人の孤独を考える」

本講演では、キリスト教会の牧師の立場から現代人の孤独について考察されていた。

そもそも孤独は誰の内にも持っているものであり、人間にとり最も根源的で、かつ究極的な課題である。また、孤独は心理発達段階のいたるところで生起するものであり、個性性が強いいため、孤独といっても単純ではない。

初めに講演者は、孤独の性格について述べた。それには、①普段は意識化されない漠然としているもの、②だれも理解者がいないと感じるもの、③関係が断たれ、孤独・孤立した状態であるもの、④一人でいることのできるものがある。

また、現代人の孤独は、それまでとは少し異なっており、家族や社会病理を背景とした深さが備わっている。心の内部の悩みと孤独は比例しており、悩みが大きいと孤独になる。そのため、現代の孤独は、傷ついた孤独とされ、孤立や逃避といった性格を帯びたものとなる。そして、孤独の本質は、誰とも繋がっていない状態で「見捨てられ感」が存在する。

一方、われわれが孤独に対処するためには、時に、孤独を意識化することも必要である。例えば、孤独の原因（ものごとがうまくいかないとき、先が見えないとき）、自覚症状（心の動揺、不満感、心

の落ち着かない状態）、時期（いつやってくるかわからない）に焦点をあて意識化を行う必要がある。

ところが、孤独が深まると、不安や恐れがあるため、自分に向き合うことに耐えられず何かに没頭しようとする。そうすることで孤独は一時的に隠蔽されてしまう。例えば、さまざまなアディクション行為で解決するなどの、誤った対処法を用いる場合がある。しかしながら、確かに、孤独は危機でもあるが、創造的、超越的な世界に心を開ける契機ともなりうる。孤独は、空しい孤独感からたった一人のかけがえのない存在であるという認識へ導かれる機会でもあり、本当に自分に向き合った時、深い自分に根を下ろす時に、深い暗闇に気がつくこと、人間を超えた世界、もう一つの声を聞くことのチャンスでもあるのだ。

講演者は、最期に、孤独とは異なり、自分自身でいることをソリチュードと述べた。これは、独りでいられる孤独であり、人と交わることができるものである。そして、孤独であること、ロンリネスからソリチュードへどのように向かえるかが課題となる。また、その過程には、一方向的に進んでいくのではなく、行きつ戻りつしながらも、前進をしていくことが大切であると述べている。この、ロンリネスからソリチュードへの旅の過程では、①神の前で鎮まる黙想、②霊的旅路の同伴者を持つことが必須となる。

このような旅の終着には、神との繋がり、自分との繋がり、そして人と繋がる時には、人は真の意味で独りを勝ち取ることが可能となるのである。

（文責：おち・ゆうこ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程）

（2010年10月22日、新都心ビジネス交流プラザ4階会議室）